

表紙/佐藤B作『ザ・空気 ver.3 として彼は去った…』
 撮影:西村淳
 裏表紙/入野自由『ピーター&ザ・スターキャッチャー』
 撮影:HIROE YAMAUCHI
 企画・発行/公益財団法人豊橋文化振興財団
 編集・デザイン/味岡伸太郎+有限公司STAFF
 令和2年12月発行 47号[隔月発行]

PLAT CALENDAR

1 January

- 5 [火] プラット親子わくわくプログラム2020
鈴木智子『クラシカルクロスオーバーの世界』
【振替公演】◎PLATアートスペース
- 17 [日] 『ピーター&ザ・スターキャッチャー』
◎PLAT主ホール
- 22 [金] 西垣恵理・鈴木雅子
ヴァイオリン&ピアノ DUO コンサート
◎PLATアートスペース
- 23 [土] 第7回新春 天狗連名人会?
◎PLATアートスペース
- 29 [金]—31 [日] PLAT小劇場シリーズ
マームとジプシー『BEACH BOOTS CYCLE』
◎PLATアートスペース
- 31 [日] 第19回とよはしまちなかスロータウン映画祭
オープニングイベント 佐藤浩一シネマ&トーク
◎PLAT主ホール

2 February

- 5 [金] 東三河インターンシップフェア No.2
◎PLATアートスペース
- 6 [土]—7 [日]
第19回とよはしまちなかスロータウン
映画祭 一般上映
◎PLATアートスペース
- 11 [木・祝] 豊橋おやこ劇場協議会
第457回小学生例会
人形劇団むすび座『かくれ山の冒険』
◎PLAT主ホール
- 11 [木・祝] 飛翔II ◎PLATアートスペース
- 13 [土]—14 [日]
第19回とよはしまちなかスロータウン
映画祭 一般上映 ◎PLATアートスペース
- 20 [土]—21 [日]
二兎社『ザ・空気 Ver.3 として彼は去った…』
◎PLAT主ホール
- 20 [土] 第19回とよはしまちなかスロータウン映画祭
ピーター・バラカントーク&DJイベント vol. V
◎PLATアートスペース
- 20 [土]—21 [日]
第19回とよはしまちなかスロータウン
映画祭 一般上映 ◎PLATアートスペース
- 27 [土] 第8回 桜丘高等学校ダンス部
自主公演「one more light」
◎PLAT主ホール

公益財団法人
豊橋文化振興財団情報誌
2021年1月-2月
vol.47



TOYOHASHI
ARTS
THEATRE
PLAT

プラットニュース

CONTENTS

- 表紙
『ザ・空気 ver.3 として彼は去った…』
佐藤B作
- 2
INTERVIEW:1
『ピーター&ザ・スターキャッチャー』
ピーター・パンの冒険を。
ワクワクドキドキな冒険を。
ノゾエ征爾
- 4
INTERVIEW:2
マームとジプシー
『BEACH BOOTS CYCLE』
演劇の考え方を立体的に。
藤田貴大
- 6
INTERVIEW:3
二兎社
『ザ・空気 ver.3 として彼は去った…』
舞台は某民放テレビ局9階の会議室。
永井 愛
- 10
INTERVIEW:4
読売日本交響楽団 特別演奏会
華麗なるシヨパン&《展覧会の絵》
不思議な指揮者でありたいと願っています。
原田慶太楼
- 12
INFORMATION
PLAT主催公演情報
- 14
PURA PURA
バラコの寄り道ぶらぶら
桑原裕子
「青春時代」
- 15
SUPPORT
TICKET CENTER

裏表紙
『ピーター&ザ・スターキャッチャー』
入野自由
PLAT CALENDAR



TOYOHASHI ARTS THEATRE
PLAT

INTERVIEW:1

『ピーター&ザ・スターキャッチャー』

トニー賞5冠を勝ち取ったヒット作、日本初演。

1月17日[日]13:00開演

作=リック・エリス

原作=デイヴ・バリー、リドリー・ピアスン

音楽=ウェイン・パーカー

翻訳=小宮山智津子

演出=ノゾエ征爾

出演=入野自由、豊原江理佳、宮崎吐夢、櫻井章喜／

竹若元博、玉置孝匡、新川将人、KENTARO、

鈴木将一朗、内田健司、新名基浩、岡田正

演奏=田中醫、野村卓史

会場=PLAT 主ホール

ノゾエ征爾[のぞえ・せいじ] / 脚本家・演出家・俳優。劇団「はえぎわ」主宰。1995年青山学院大学在学中に演劇を始める。1999年、「はえぎわ」を始動以降、全作品の作・演出を手掛ける。2012年、第23回はえぎわ公演『〇〇アル風景』で第56回岸田國士戯曲賞受賞。外部公演をはじめ、映画、ドラマにも、脚本家、演出家、俳優として多数参加。10年から世田谷区内の高齢者施設での巡回公演(世田谷パブリックシアター@ホーム公演)を続けている。16年にはさいたまスーパーアリーナで高齢者1600人出演の、1万人のゴールドシアター 2016『金色交響曲～わたしのゆめ、きみのゆめ～』の脚本、演出を手掛けた。近年の演出作品に、PARCO Production『ボクの穴、彼の穴。』、東京芸術祭2019野外劇『吾輩は猫である』、音楽劇『トムとジェリー～夢よう一度～』、世界ゴールド祭2018GAC『病は気から』など。新国立劇場では、2014年二人芝居『ご臨終』を演出。



演出

ピーター・パンの前日譚。ワクワクドキドキな冒険を。ノゾエ征爾

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場PLAT 芸術文化プロデューサー

言葉も柔らかくて品がある。とても信頼しています。

矢作—— 演出的な面ではどのようなことを目指しているのでしょうか。

ノゾエ—— 演劇そのものが身近に感じれるようにしたいです。気楽に肩肘張らずに観れて、気が付いたら舞台と客席の隔たりが薄れている。そんな、敷居の高くない作品にできたらなと思っています。

稽古場でも、話しのしやすい空間を心がけています。いろんな出自の役者さんを選ばせていただいたのは、色んな感性をみんなで持ち寄りたかったから。僕も自分の考えを押し付けない。自然とチームが一体になって、座組の温度そのものも、作品と一緒にお客さんの肌に届くといいなと思っています。

矢作—— 今回、音楽はどういう位置付けになるのでしょうか。

ノゾエ—— 生演奏で大迫力です(笑)。ただ、楽譜の中に「このセリフで何の楽器」とか、全部指定が入っているんです。もちろん守りつつも、稽古場で生まれる衝動も大切にしています。音と言葉が、切り離されたものではなく同等の位置にあるような混ざり方を日々探しながら進めています。

矢作—— 音楽監督の田中醫さんは、ノゾエさんによる人選ですか。

ノゾエ—— はい、ここ何年も一緒にやらせてもらっていて。彼の好きなのは、僕の想定と違う音楽を作ってくること。でもそれがすごくよくて、常に嬉しい驚きをもたらしてくれる。そういうズレによる摩擦が最高に面白い。それと彼は頭が柔らかくて、こうかな?どうかな?と言った話し合いがストレスなくできるのはすごく大きいです。

矢作—— 出演者の皆さんはバラエティーに富んだ方々ですが、どのようなことを期待されますか。

ノゾエ—— 「ピーター・パン」に対してあるイメージを、いい意味でお客さんにも忘れさせぐらい、リアリティーのある彼らでいてほしいと思っています。役者さんそれぞれの「人」をなるべく偽らずに、そのうえで役にとって必要なものと融合して、彼らだったからこそこの人物になることを期待しています。

矢作—— 地方公演で、東京での公演と何か差を感じる部分はありますか。

ノゾエ—— 「こんな演目が来てくれた!」といった大きな期待感をもってご来場いただけている気がします。東京よりも演劇、劇場に対してスペシャル感があり、わくわくしているのを感じます。なのでやってる側としてもすごく楽しい。東京も楽しいけど、厳しい視線もたくさんあるので…(笑)。

矢作—— 最後に、豊橋のお客様にメッセージをお願いします。

ノゾエ—— 物語だけでなく、目でも耳でも楽しめる作品です。年齢層も問わないので、上の方から小さいお子さままで皆さん、ぜひ遊びに来ていただいて、一緒に楽しい空間にできたら最高です。心よりお待ちしております!

矢作—— ありがとうございます。

矢作—— ノゾエさんによく豊橋にお越しいただけるということで、とても嬉しく思っております。今回「ピーター&ザ・スターキャッチャー」の演出を担当されますが、まずは普段はどういった活動をされているかお聞かせいただけますでしょうか。

ノゾエ—— 21年やっている劇団「はえぎわ」をベースに、脚本、演出、俳優をしています。最近だと例えば、10年前から世田谷パブリックシアターの企画で高齢者施設および障がい者施設を回る公演をやっています。演劇表現とは?みたいなところで頭でっかちになっていたのですが、今日の前にいるおじいちゃんおばあちゃんを楽しめること、それができなくて何ができるのか、ということにまずぶつかった。演劇は幅広くあるべきだと気づきましたし、自分自身、しなやかでありたいと思いました。仕事のご依頼に対しても、自分に出来る気がしないものでも、ともかく挑戦してみる。得られるものは必ずあるし、柔軟性も試される。そういった活動を心がけています。

矢作—— 今回の作品の魅力や、チャレンジしたいところはどのような点ですか。

ノゾエ—— 初めて読んだ時は、「???」ばかりでした(笑)。要は、プアシアターという、ほとんどのことを俳優全員で表現していくような手法で作られているので、読んだだけでは分かりにくかったんですね。でも稽古してみると、雑然と思われたものが実は全て必然だったことに気付かされて。物語だけでなく、俳優の身体や生演奏や、あらゆるものが集約して一つの作品になっている。お客さんも色んなことを想像しながら観ることになるので、人によって作品の色合いも変わるのが魅力に感じています。僕自身、演劇を始めた頃のようなワクワクいっぱい日々稽古しています。

矢作—— 「ピーター・パン」につながる前日譚ですが、親子でご覧いただくことは意識しているのでしょうか。

ノゾエ—— 好きな言葉で、ピーター・ブルックの「子どもに言ってわからないことは、大人に言ってもわからない」というのがあるんですが、ともかく小難しいことは考えまないと。僕らが純粹に夢中になれば、自ずと広い方々に響くものになるだろうと、ともかく毎日無心になって、楽しんで作っています。

矢作—— 海外で高く評価され様々な賞も受賞している作品ですが、それは意識していますか。

ノゾエ—— その評価を信じ過ぎないようにとは気をつけています。俳優の身体性やお客さんの感性も違うし、大人が持つ童心具合も違います。全部が全部、海外で面白かったから、とはいかない。改めて日本人にとってもちゃんと面白いかは検証しながら進めています。とは言え日本人ばかりを意識しても良くない。結果的に国関係なく楽しめるものができたら嬉しいです。

矢作—— 脚本は翻訳の小宮山智津子さんと相談しながらつくったのでしょうか。

ノゾエ—— 基本的にはおまかせしました。小宮山さんは日本と海外のどちらの感覚もすごくわかっておられて、

1月29日[金]19:00開演『BEACH』

30日[土]13:00開演『BOOTS』

18:00開演『CYCLE』

31日[日]13:00開演『CYCLE』

作・演出＝藤田貴大

会場＝PLATアートスペース

PLAT小劇場シリーズ

マームとジブシー

『BEACH BOOTS CYCLE』

3作品ともに独立した作品でありながら、登場人物が3作品の中でシンクロする。

矢作——『BEACH BOOTS CYCLE』とは、どのようなことを描いた作品なのでしょう。

藤田—— いずれも、朝、昼、夜、翌朝の一日半を描いた作品で、『BEACH』はビーチ、『BOOTS』は山小屋、『CYCLE』はレストランのオープンからクローズしてから次の朝までです。『BEACH BOOTS CYCLE』のテーマは、東京にいる僕らと同世代の人たちを描くことです。それをシューズブランドの trippen と取り組んでいます。

矢作—— どのような形で trippen とコラボレーションしているのでしょうか。

藤田—— この企画では、キャラクターがどのような靴を選ぶかを話し合うところから始めました。最初に僕のプロットはあるけれど、演劇が先にあるのではなく、trippin チームと、この登場人物に履かせるならこのモデル、みたいな話し合いの中で脚本を練っていきます。初めて trippen の展示会に呼ばれたとき衝撃を受けました。とにかくたくさんの靴が置かれていて、なんとなく演劇との親和性を感じました。よくよく話を聞いてみたら、デザイナーの方が舞台美術家出身の方だったんです。trippin が発表している靴にはヒールが「台座」で、その上に革が乗っているというような「舞台的」な捉え方でデザインされている靴もあります。舞台の高さを上げていくほど「虚構」の度合いが上がっていくと言われていますが、それと同じように、靴もヒールの高さを上げれば上げるほどかしてまろし、下げるとよりカジュアルになる

んだと、trippin の人たちが仰ってました。そういう trippen の考え方が演劇とすごく似ていると思っています。

今回に関しては、演劇とファッションのジャンルを作品の中でクロスオーバーさせていますが、ファッションだけでなく、演劇以外の分野から影響を受けて「演劇」を作るという試みをこの10年くらい模索しています。この実験性の先に、今までになかったテイストが生まれると思っています。また、コロナ禍になって、これから演劇をどう企画してどう世に提示するか、シビアに求められる気がしています。コロナが流行って自由に活動が出来なくなった期間でも、trippin の方とのミーティングは続けていました。その中で、今彼らがどう自分たちの商品を広報するか、どう見せるか、販売方法は?など本質的な考え方に触れました。その考え方が演劇の企画や制作にも通じるところがあるな、と改めて思いました。ジャンルは違っても、同じようなことを考え、それを実現させる努力をし続けていて、本当にどの業種も我々の活動とは無関係ではないんだと思っています。

矢作—— このコロナの状況の中における創造や発信をどうお考えですか。

藤田—— やはり演劇は演劇たる楽しみ方があると思っています。僕は Zoom 演劇が「観劇体験」の代わりになるとは思えなくて。考え方も日々変わっていくとは思いますが、演劇は観客の皆さんに会場に来てもらって、「今」という時間を共有していくという場だと思っていま



藤田貴大[ふじた・たかひろ] / マームとジブシー主宰 / 演劇作家。1985年生まれ。北海道出身。07年マームとジブシーを旗揚げ。以降全作品の作・演出を担当する。作品を象徴するシーンを幾度も繰り返す“リフレイン”の手法で注目を集める。11年6月-8月にかけて発表した三連作『かえりの合図、まったり食卓、ここ、きつと、しおふる世界。』で第56回岸田國士戯曲賞を26歳で受賞。13年、15年に今日マチ子の漫画「cocomoon」を舞台化。同作で2016年第23回読売演劇大賞優秀演出家賞受賞。演劇作品以外でもエッセイや小説、共作漫画の発表など活動は多岐に渡る。

す。舞台を見るためには、観客の皆さんが足を運んで観て帰るまで、行き帰りの時間も含めると3～4時間ぐらいは必要です。時間だけじゃなくて、交通費や時には宿泊費、人によってはお子さんをシッターさんなど預けて来ることを選んでくれている人もいます。だから、経費も時間もチケット代以上をかけてきてくれているわけです。それが今年コロナでなくなって、じゃあその代わりに無料で Zoom 配信しましょう、とは僕らはなれなかった。これまで僕らに使ってくれていた時間やお金を、観客の皆さんにどう使っていただくかを考え続けてきました。例えば僕のテキストを家の中にいる時間が増えたから読める時間があるかもしれないとか、動画については、「演劇」をそのまま配信という形で見せるというよりは、映像作品を作り DVD 販売して、そのパッケージを手触りある凝ったものにして、それを購入してもらって皆さんのご自宅にお届けできる企画にしました。それ以外にも、今までとは異なる形でアウトリーチ的に手を伸ばせることはもっとあるはず。

人間って、最低限、衣食住をまずはどうにかしたい。だけど、たぶんそれだけではどうしようもない動物だと思うんです。もうちょっと豊かな時間を過ごしたい。例えば家でネットで動画を観るよりも、もうちょっと足を伸ばして、映画館で映画を見るときか、劇場で生で演劇を観たいとか、そんな風に思うと思うんです。それこそ、豊かな時間の過ごし方とか使い方だと思うし、この感情こそが「人間」なのだと思います。

矢作—— 『BEACH BOOTS CYCLE』というタイトルだけを見ると、一つの作品なのかなという印象も持ちますが、一つずつの作品が3つなのですね。

藤田—— 2019年にプラットでも上演した『CITY』も、『BEACH』と『BOAT』もそうですが、最近、頭文字をA・

B・Cを使って、タイトルをつけてます。自分の中ではA・B・Cに納得がいったらDに移るんだと思うのですが、まだうろろしています。『apart』という映像作品も発表していて、この作品は1月の公演の時にホワイエで観られるようにしようと思っています。『apart』と『BEACH』と『BOOTS』と『CYCLE』は、一作ずつ完結しつつも一つのつながった物語としても観れるみたいにしたと思っています。この作品を全て一緒にツアーをして、作品をお客さんが選択できる「マーケット」みたいな状態にしたいと思っています。だから、お客さん自身でこれを観てこれを観ないというそれぞれの判断に託したいです。

矢作—— 劇団としては挑戦的だし、その労力は、スタッフも俳優も3本というのは大変だと思うのですが、いかがですか。

藤田—— 僕は18歳まで北海道伊達市にいました。東京の同世代の人は、子どものころから劇団四季をたくさん観れてるんだろうな、とか思い続けてきました。一方で僕は北海道の小さい町に来た、子ども向けっぽい作品を年に1本とかしか観ることができなくて、それがすごいコンプレックスでした。

僕自身も1つの作品で自分の全てを語り尽くせていると思っていませんし、1つの劇団や一人の作家のことを理解するためには、何作品か観なきゃいけないと思います。東京から作品をこんなにたくさん呼んでいる豊橋だとしても、1つの劇団や作家の作品をその土地で上演できる機会は多くても年に1度です。僕らとしては、その1回で、複数の作品を東京から持ってきて、劇団のことや僕自身の作品の捉え方も知ってもらいたいと思います。今回のツアーでは作品そのものの一つ一つの素晴らしさもちろん豊橋に持ってきたのですが、それと同時に、もっと前の段階というか、僕らが考えて言える「演劇」や「演劇をやるための集」の考え方や捉え方も見せることができたらと思っています。

矢作—— 今回は、全国3か所すべてで3作品が上演されます。3作品を持ち歩き、それをどう見せていくのか楽しみにしています。



作・演出

演劇の考え方を立体的に。藤田貴大

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 芸術文化プロデューサー

二兎社 『ザ・空気 ver.3』 として彼は去った…』

「メディアをめぐる空気」シリーズ完結。

2月20日[土]・21日[日]13:00開演

作・演出=永井愛

出演=佐藤B作、和田正人、韓英恵、金子大地、神野三鈴

会場=PLAT主ホール

中島—— 毎年二兎社には来ていただいておりますが、今年はメディアをめぐる『ザ・空気』シリーズの最終作です。今回はどのようにメディアを扱ってられるのでしょうか。

永井—— 最初の『ザ・空気』は某民放テレビ局、『ザ・空気 ver.2』は国会記者会館の屋上で物語が展開しました。今回の『ザ・空気 ver.3』ではまたテレビ局に戻ります。『ザ・空気』のときは1つの装置を使いながら、照明などで少しずつイメージを変えて、エレベーター前が出てきたり、打ち合わせ室前が出てきたりしましたが、メインとなったのは、誰も使わない「9階の会議室」でした。今回もその同じ会議室が舞台となります。

中島—— 9階というのもいいですし、『ザ・空気』『ザ・空気 ver.2』と見ている人たちは、「ああ、そうだった」と、あの鮮烈なイメージを思い出すでしょうね。

永井—— 『ザ・空気』は、コメディにするつもりで書いていたんですけど、出来上がってみると怖いという印象がすごくあったみたいで、「社会派ホラー」とか言われました。このネーミングは気に入っていますが、『ザ・空気 ver.2』はもっと喜劇タッチのものにしたかったです。

かなり笑っていただけたのではないのでしょうか。今回は怖さと笑いの両方が混ざったものにできればと考えています。

中島—— 脚本がなかなか書き進まない…と伺いました。

永井—— まさに「今」とリンクした作品なので、実際の政治状況が変わってくると、芝居の内容も影響を受けてしまうんです。現実に合わせて設定を変えなければいけなくなったりして。そこが難しいですね。

中島—— これまでも、出演者の方々の顔ぶれはなかなかユニークでした。今回のキャスティングについてはいかがですか。

永井—— 昔から佐藤 B 作さんの大ファンでした。毒気があって、でもチャーミングで、何とも言えぬ愛嬌がありますよね。イメージとしては失礼かもしれませんが、非常にいい加減な感じもあるし、なおかつ非常にまじめな感じもある。それが無理なく同居する。役者としては、なかなかキャパシティの広い人だと思います。前から出演していただきたくて、これまで何度もオファーしていました。今回やっと出演が実現して嬉しいです。

佐藤 B 作さんの役どころは、思い切り政府寄りの政



聞き手 中島晴美 種の国とよはし芸術劇場 PLAT シニアプロデューサー
舞台は某民放テレビ局9階の会議室。永井愛 作・演出

治評論家です。その人が、「報道9(ナイン)」というBSニュース番組にゲストコメンテーターとして出演するためにやって来るところから話が始まります。意見の異なる有識者どうしが激論するコーナーに登場する予定だったのですが、ある「ゆゆしき事態」が起きたため、出演が難しくなる。そこから少しずつ調子が狂っていくという話です。

神野三鈴さんがそのニュース番組のチーフプロデューサー、和田正人さんがチーフディレクター、韓英恵さんがサブキャスター、として金子大地さんがアシスタントディレクターを演じます。そこに、B作さん演じる政治評論家が絡んでいきます。

私、朝のワイドショーをよく見るんですが、その番組の中で「ADが廊下でゴロゴロ寝ている。」と司会者が言ったんです。「あ、そうなんだ。みんな廊下で寝ているんだ。それを、使わせてもらおう。」と思いました。テレビ局はブラックなんですね。だから、たぶん金子さんも廊下で寝ることになるでしょう。

中島—— 時間も場所もなく、着替えもなく、そして今は、密になるのを避けているから、部屋もないらしいので、廊下で寝たりしているみたいですね。

永井—— 今、テレビ局がすごくスタッフを絞っているため、廊下を歩いても、誰ともすれ違わないという話も聞きました。私たちの作品では、出演者がう人しか出てこないで、かえってやりやすいのですけれど。

中島—— 今回、永井さんのお芝居に初めて出る方はいらっしゃるでしょうか。

永井—— 全員初めてです。『ザ・空気』シリーズでは、第1作目から、二兎社初出演の方ばかりに出ていただいています。

中島—— 新しい人の参加で、イメージーションを役者さんからいただくということはおありですか。

永井—— ありますね。本当はどういう人かは知らないんです。ただ、写真を机の前に貼って顔を見ていると、「この人はこんなセリフを言いそうだな。」とか、「言わなそうだな。」とかいう気がしてくる。顔の語る情報から勝手に想像を膨らませて、「この人にこういうことを言わせたらおもしろいな。」なんて考えたりして、今は、その役者さんの顔から出てくるイメージにずいぶん助けられています。顔が含んでいる情報って、おちゃめだとか、臆病だとか、簡単には言い切れない。あらゆるエネルギーが

同居している感じがある。その立体感が、単なるキャラクターで書かないようにするために、すごく大事だなと思います。

中島—— 舞台美術はずっと続いていらっしゃる大田創さんでしょうか。照明、音響も同じメンバーの方ですか。

永井—— ブランナーはもうずっと二兎社組ですね。

中島—— 舞台監督の澁谷壽久さんが久しぶりに戻って来られたのですね。

永井—— 『ザ・空気』以来、久々の復帰です。

中島—— 『ザ・空気』の時と同じで再びテレビ局となったのには、何か理由があったのですか。

永井—— 皆さん、新聞を読まなくなってきましたよね。ネットもかなり影響力はありますが、やはりテレビの報道のあり方が民意に大きく影響し、物事の方向性を決めて行くと思うからです。特に安倍前首相の引退会見で「志半ばで辞める悲劇の首相」というイメージを作ったり、菅首相を「苦勞人」と持ち上げ、「パンケーキおじさん」と呼んで親しみやすさを演出したりするテレビのワイドショーには強い違和感を覚えました。もちろん芝居ですから、糾弾するために書くわけではありません。メディアが政権との関係において萎縮・忖度・自己規制に陥っ

ていく過程には、ものすごいドラマがあると思うんです。そこにはやはり日本人独特の習性も働いていますし。

中島—— 独特の習性とは、例えばどのようなことでしょうか。

永井—— 物事をはっきりさせないということでしょうか。権力者が聞かれないことを質問してしまったら、嫌われて仕事がやりにくくなるんじゃないかということを考える。要するに、ジャーナリストの使命よりも、自分の社が今後政権との関係が悪くなって不利になるのではないかと、先を先に心配する。または自分の出世のことを考える。例えば政権に批判的な番組が上層部の忖度によって次々変更させられ骨抜きにされ、まったく違う番組になってしまう。思い切ったことを書いた記者が解雇される、もしくは飛ばされる。それは、正当なことだと思いますか。

たぶん欧米のメディアならば、「もし自分がこんなことを言ったら飛ばされるかもしれない。」と考える人はいない。アメリカでは、女性記者の質問に気分を害したトランプ大統領が記者会見を打ち切ってしまいましたよね。その時、「あなたは大統領ですよ。そんな態度を取っていいんですか?」とまで聞いていた。ジャーナリストの権利は守られているし、会社を超えた記者同士の連帯も

メディアが政権との関係において 萎縮・忖度・自己規制に陥っていく過程には、 ものすごいドラマがある。

永井愛[ながい・あい] / 劇作家・演出家。二兎社主宰。「言葉」や「習慣」「ジェンダー」「家族」「町」など、身近や意識下に潜む問題をすくい上げ、現実の生活に直結した、ライブ感覚あふれる劇作を続けている。主な作品に『ザ・空気 ver.2』『ザ・空気』『鷗外の怪談』『歌わせたい男たち』『ら抜き殺意』など。紀伊國屋演劇賞個人賞・鶴屋南北戯曲賞・岸田國士戯曲賞・読売文学賞・朝日舞台芸術賞秋元松代賞・芸術選奨文部科学大臣賞・毎日芸術賞、読売演劇大賞最優秀演出家賞などを受賞。



『ザ・空気』撮影：本間伸彦

INTERVIEW:3



『ザ・空気 ver.2』撮影：本間伸彦

ある。だけど、日本は権力を批判したら飛ばされる。それに、他の記者も応援してくれない、労働組合も動かないということが前提になっている。

欧米ではジャーナリズムとは何なのかという定義がはっきりしている。国民の「知る権利」にこたえ、国民がより民主的な選択をするための材料を与える、それがジャーナリズムの使命だと。しかし、日本は為政者から特ダネを取るために仲良くし、「懐に飛び込む」と言って、一緒にご飯を食べる。そして、情報を提供してもらえなくなることを恐れて、何かまずいことがあっても書けなくなる。メディアが政府の広報と化してしまっているのに、それを当たり前のこととしてみんなも受け入れている。集団で何かを決めるとき、論理よりも力関係に引きずられてしまう現象は、メディアに限らず、学校や職場、バイト先など、日本中のあらゆるところで起きている。その中で、忖度があり、萎縮があり、そして身を守るために我慢することが、当然のことになっている。日本人のメンタリティとして、物申す人が嫌われ、つま弾きにされる。そういうことをもうずっと続けている。それでは、誰の幸せにもならないと思います。

中島—— 今思うと、この「空気」というタイトルがやはりなかなか思い切ったタイトルですね。

永井—— 最初に私が付けようとしていたのは『戦略』というタイトルだったんです。フランスのミシェル・ウエルベックの『服従』という小説がヒントになりました。フランスが、非常に淡々と、いつのまにかイスラム主義に支配されていく様子を描いた話です。『服従』という題を聞いただけではあまり興味があかなかったのですが、読んでいたら「服従」が何を意味するのか段々分かってきて、すごくおもしろかった。そこから着想を得て、実

際には服従しているのにそれを認めず、「これは戦略だ」と自分に言い聞かせ、敵の術中にはまっていく、そんな芝居をやってみたくて思ったんです。でも『戦略』だとあまりにも地味だと思い、チラシを入稿しなきゃいけないギリギリのタイミングで『ザ・空気』に変えました。

中島—— 今の日本で起きていることで気になっていることはありますか？

永井—— やはり学術会議のことですね。首相が6人の任命を拒否した影響はすごく大きい。そして、この次に標的になるのは芸術文化ではないでしょうか。政権の意図に沿わないものについては、助成金を減らす方向に行くでしょうね。あるいは、交付を内定したけれど、実際にできたものを見たら、申請書類と違う部分があるというような理由で、払えませんと言われるかもしれません。「学問の自由」を脅かすことは、「表現の自由」を脅かすことにもつながると思います。

中島—— では最後に、豊橋の演劇ファンの皆さんに一言お願いします。

永井—— 豊橋のお客さんにどう受け取られるかということは、作品の出来を考える上で1つの指針になるんです。私が劇場のロビーにいと、すごく積極的に質問に来られる方がいたりして、豊橋のお客さんは本当に芝居をよく観ているなと。非常に自覚的な市民が来ています。東京で練り上げた舞台を目の肥えた豊橋のお客さんに観てもらえるのは嬉しいですね。精一杯の作品を持ってお目にかかれることをとても楽しみにしています。

中島—— いつもの永井さんのすばらしい作品を、お待ちしております。どうぞよろしく願いいたします。今日はお忙しい中、どうもありがとうございました。

すると、すごく良い作品がいっぱいある。「やっぱり好き」と確信して楽曲だけでなく、演奏法も注意深く、古い時代から調べてみると、楽譜に書かれていない情報がたくさん隠れているのに気づきました。僕はポーランドで知り合った友人、先生たちの協力も得ながら、そうした演奏の伝統を究めます。

池田—— 最後は、読響について一言。

原田—— 日本を代表するばかりか、僕のやりたいことをやらせてくれる素晴らしいオーケストラです。今回、僕たちが演奏する作品には、コマーシャルや映画、デパートで誰もが聴いたことのある親しみやすいメロディーもいっぱい出てきますから、どうか、リラックスしてお聴きください。

ました。何か、特別なご縁でもあるのですか？

原田—— ロシアといい、ポーランドといい、僕は寒い国が好きなのかしら？(笑)実はポーランドの国際指揮者コンクールを受けたとき、シマノフスキやペンデレツキ、ルトスワフスキ、パツフニクラ、それまで知らなかったポーランドの作曲家と一気に出会ったのです。勉強



不思議な指揮者でありたいと願っています。

指揮 原田慶太楼

聞き手 池田卓夫 音楽ジャーナリスト @y_k_taku 本誌 ④

けました。僕は変わった指揮者に興味がありますし、自身も不思議な指揮者でありたいと願っています。日本人の多くは「みんなと同じ」が好きですが、僕は好きじゃない。でなきゃ、アメリカにも出て行きません。

池田—— 日本人はロシア革命(1917年)以前から地理的にも近いロシアの文化に親近感を持ち、革命後に日本へ亡命してきたロシア人が多くの日本人音楽家を育てるなど、元々ご縁は深そうですね。

原田—— 大昔は地続きでした。とりわけ極東ロシアは日本の至近に位置していて、知らず知らずのうちにDNAで覚え、言葉には言い表せないような結びつきが育まれてきたのだと思います。バレーボールをはじめとするスポーツでも、ロシアのチーム選手を応援する日本人は多いです。だからロシアの音楽も、日本人の心にしっくりと伝わるのだと考えています。

池田—— 昨年、ある演奏会で慶太楼さんがショパンの『ピアノ協奏曲第1&2番』を指揮したとき、楽譜に書かれていない「訛り」というか、ポーランド人音楽家にしか再現できないような細かいニュアンスまでしっかり音にしていたのに、驚き

バレンタインデー 1週間前の日曜昼下がり、ライブポートとはしコンサートホールに読売日本交響楽団(読響)が素敵なお男性アーティスト2人……指揮者の原田慶太楼、ピアニストの牛田智大とともにやってくる。ロシア音楽の名作2つの間にショパンの青年時代の傑作、『ピアノ協奏曲第1番』がはさまる。一見、均整のとれたプログラムながら、3曲が1つの「定食」セットに盛り込まれる機会は意外と少ない。選曲の背景や聴きどころについて、マエストロ原田の話を聞いた。

池田—— なぜ、この3曲なのですか？

原田—— 後半のオーケストラ曲がムソルグスキー作曲、ラヴェル編曲の組曲『展覧会の絵』である以上に、コンサート全体のテーマが「展覧会」なのです。ソリストの牛田さんが希望する作曲家のショパンを出発点に、プログラムを組みました。『ピアノ協奏曲第1番』はショパン20歳、1830年の作品です。グリンカがオペラ『ルスランとリユドミラ』の作曲に着手したのは、1837年。そこで前半は、同じ1830年代のヨーロッパでもポーランドとロシア、これだけ異なる音楽が生まれていたのだという対比を美術館よろしく、体験していただきます。『ルスランとリユドミラ』序曲はオペラ全体のストーリーを全く知らなかったとしても—— そういう人の方が大多数でしょう—— わくわくした気分を楽しめる、親しみやすい小品です。次のショパンでは牛田さんのピアノが、音楽の内面を深く語りかけてくださることでしよう。

1839年にロシアで生まれたムソルグスキーは、前半の2曲が演奏されていた時代のヨーロッパで育ちました。とりわけ同じ国の作曲家、グリンカの作品は頻繁に聴いていたはずですが。ムソルグスキーが『展覧会の絵』に与えた色とりどりの音の個性にも、グリンカの影響の跡はあります。冒頭だけでなく、全曲の折々に現れる『プロムナード』の旋律は、1枚の絵から次の絵へと移る動作の描写でもあり、ホールに集まった皆さんも一緒に、音の美術館めぐりにお付き合ってください。

池田—— 慶太楼さんは4歳から17歳まで東京都内のインターナショナルスクールで学んだ後すぐ、アメリカ合衆国へ留学したので「アメリカンなマエストロ」と思われがちですが、指揮法を本格的に学んだのはロシアですね。

原田—— 指揮を本格的に志望し始め、色々な指揮者のビデオで学ぶうちに強く惹きつけられたマエストロがワレリー・ゲルギエフ、ユージ・テミルカーノフ、セシオン・ビシュコフでした。3人ともロシア出身、サンクトペテルブルク音楽院でイリア・ムーシン教授に師事しました。僕は子どものころからディズニー映画の『ファンタジア』が大好きなのですが、ミッキーマウスがデュカスの交響詩『魔法使いの弟子』を指揮する姿に、この3人は似ています。特にゲルギエフ!タクト(指揮棒)を持ったり持たなかったりなのに、他の指揮者とはもの凄く何かが違う。ムーシン先生はもう亡くなっていたのですが、とにかくロシアに向かい、その流れをくむ先生方の指導を受

牛田智大[うしだ・ともはる] / 1999年福島県いわき市生まれ。5歳で上海市のテレビ局主催の子供コンクール年中の部第1位。5年連続でショパン国際コンクール in ASIAで第1位。2012年浜松国際ピアノアカデミー・コンクールにて最年少1位。同年、ユニバーサル・ミュージックよりCDデビュー。19年に最新CDをリリース。各地でのリサイタルに加え、プレトニョフ、カズブシク、小林研一郎らの指揮でロシア・ナショナル管、ハンガリー国立フィルなどと共演。19年出光音楽賞受賞。



©Ariga Terasawa

原田慶太楼[はらだ・けいたろう] / 1985年東京生まれ。指揮法をサンクトペテルブルクで学び、21歳でモスクワ響を指揮してデビュー。以後、欧米、アジアで国際的に活躍している期待の俊英。米シンシナティ響などのアソシエイト・コンダクターを務めた後、20年からは米ジョージア州サヴァンナ・フィルの音楽&芸術監督を務める。10年小澤征爾フエロー賞、13年ブルーノ・ワルター指揮者レビュー賞、14・15・16年米国ショルティ財団キャリア支援賞を連続受賞。オペラ指揮者としても実績も多い。

読売日本交響楽団 Yomiuri Nippon Symphony Orchestra

1962年、読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビのグループ3社を母体に設立。以来、世界的な指揮者、ソリストと共演を重ねている。現在、常任指揮者をドイツの名匠ヴァイグレが務め、東京のサントリーホールなどで演奏会を多数開催。2017年のメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉(全曲日本初演)が好評を博し、『音楽の友』誌の「コンサート・ベストテン」で第1位、サントリー音楽賞などを受賞。演奏会などの様子は日本テレビで放送されている。

2月7日[日]15:30開演

指揮＝原田慶太楼

ピアノ＝牛田智大

管弦楽＝読売日本交響楽団

会場＝ライブポートとはし コンサートホール

読売日本交響楽団 特別演奏会

華麗なるショパン & 《展覧会の絵》

～マエストロ原田慶太楼とともに楽しむ、「音楽の美術館」の昼下がり～



託児サービス対象公演
要予約。生後6ヶ月以上。
お一人様 ¥500。お申込み、お問合せはプラットチケットセンターまで

チケットの購入・お問合せ プラットチケットセンター

- 劇場窓口・電話 0532-39-3090 [休館日を除く10:00-19:00]
- オンライン <http://toyohashi-at.jp> [24時間受付・要事前登録]

U25・高校生以下割引で案内

- ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
- 料金＝U25[25歳以下]:公演ごとに指定する席種の半額/高校生以下:1,000円
 - 購入方法＝各公演の一般発売初日から取扱。
 - その他＝本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。座席の指定はできません。要・入場時本人確認書類提示。一部例外あり。詳細は各公演チラシ・HPにて。

チケット販売について

感染予防のため発売初日の窓口販売はなし。
翌日以降残席がある場合は窓口販売あり。

新型コロナウイルス感染症予防対策として、開催日程・チケット発売日・公演内容等の変更がございます。最新情報はプラットチケットセンターまでお問合せいただくか、劇場ホームページからご確認ください。

小曽根真クリスマス・ジャズライブ



小曽根真 / 撮影:中村風詩人

『ピーター & ザ・スターキャッチャー』



入野自由 / 撮影:HIROE YAMAUCHI 豊原江理佳



宮崎吐夢 櫻井章喜

マームとジブシー『BOOTS』舞台写真



撮影:井上佐由紀

マームとジブシー『BEACH』舞台写真



撮影:井上佐由紀

市民と創造する演劇『甘い丘』

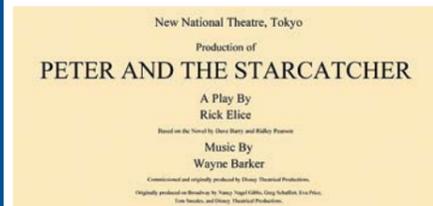


桑原裕子 / 撮影:伊藤華織

12/19 [土] 17:00開演 **好評発売中**
小曽根真 クリスマス・ジャズライブ
ジャズの最前線で活躍するピアニスト・小曽根真による、とっておきのクリスマス・ジャズライブです。
●出演＝小曽根真、RINA ●会場＝PLAT主ホール ●料金＝[全席指定]一般5,000円、U25 2,500円

2021/1/5 [火] 11:00開演 / 14:00開演 **好評発売中**
【振替公演】プラット親子わくわくプログラム2020
鈴木智子『クラシカルクロスオーバーの世界』
0歳から大人までが楽しめる、クラシックの名曲からジャズ、ラテンまで、ジャンルの枠を超えたピアノコンサート。11:00は0歳児から大人まで、14:00からは小学生から大人が楽しめるプログラムです。
●出演＝鈴木智子(ピアノ)、待井裕太(ギター) ●会場＝PLATアールスペース ●料金＝[全席自由・日時指定・整理番号付]大人1,500円、子ども(4歳～高校生)500円、0～3歳 無料(保護者ひざ上に限る)ほか

2021/1/17 [日] 13:00開演 **好評発売中**
『ピーター&ザ・スターキャッチャー』
●作＝リック・エリス ●原作＝デイヴ・バリー、リドリー・ピアンソン
●音楽＝ウェイン・パーカー ●翻訳＝小宮山智津子 ●演出＝ノゾエ征爾 ●出演＝入野自由、豊原江理佳、宮崎吐夢、櫻井章喜、竹若元博、玉置孝匡、新川将人、KENTARO、鈴木将一朗、内田健司、新名基浩、岡田 正 ●演奏＝田中馨、野村卓史 ●会場＝PLAT主ホール ●料金＝[全席指定]S席6,000円、A席4,000円ほか



2021/1/29 [金] 19:00開演『BEACH』 **好評発売中**
2021/1/30 [土] 13:00開演『BOOTS』/18:00開演『CYCLE』
2021/1/31 [日] 13:00開演『CYCLE』
PLAT小劇場シリーズ
マームとジブシー『BEACH BOOTS CYCLE』
●作・演出＝藤田貴大 ●会場＝PLATアールスペース ●料金＝[全席指定]一般3,500円、3作品セット券9,000円ほか

2021/2/7 [日] 15:30開演 **好評発売中**
読売日本交響楽団 特別演奏会 **ライブポートとよはし**
華麗なるショパン&《展覧会の絵》
●指揮＝原田慶太楼 ●ピアノ＝牛田智大 ●曲目＝グリンカ:歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲、ショパン:ピアノ協奏曲第1番、ムソルグスキー(ラヴェル編):組曲「展覧会の絵」(予定) ●会場＝ライブポートとよはしコンサートホール ●料金＝[全席指定]S席一般5,000円、A席一般3,500円ほか

2021/2/20 [土]・21 [日] 13:00開演 **好評発売中**
二兎社『ザ・空気 ver.3 として彼は去った...』
●作・演出＝永井愛 ●出演＝佐藤B作、和田正人、韓英恵、金子大地、神野三鈴 ●会場＝PLAT主ホール
●料金＝[全席指定]S席6,000円、A席5,000円、B席3,500円ほか

2021/2/23 [火・祝] 開演時間未定
舞台手話通訳養成講座
ショーケース公演『(未定)』
舞台手話通訳養成講座の受講生が手話通訳を務めるショーケース公演。
●演出＝樋口ロミ ●会場＝PLATアールスペース ●料金＝[全席自由] 無料(要申込。当日空きがある場合はご入場いただけます。)



読売日本交響楽団 特別演奏会
華麗なるショパン&《展覧会の絵》
この演奏会は、観覧の補助を受けて開催します。
<https://jka-cycle.jp>

2021/3/6 [土] 13:00開演 / 18:00開演 **発売延期**
2021/3/7 [日] 13:00開演 **3月6日13:00のみ**
市民と創造する演劇『甘い丘』
PLATの芸術文化アドバイザー桑原裕子が2007・2009年にKAKUTAで上演し第52回岸田國士戯曲賞の最終候補、そして再演時に平成21年度第64回文化庁芸術祭新人賞を受賞した作品を、公募による市民出演者・スタッフとプロのスタッフで上演します。
●会員先行＝2021年1月16日(土) ●一般発売＝2021年1月23日(土) ●作・演出＝桑原裕子 ●出演＝オーディションで選考された市民
●会場＝PLATアールスペース ●料金＝[全席指定]一般2,000円ほか [助成:(一財)地域創造]

2021/3/13 [土] 13:00開演 / 18:00開演 **発売延期**
2021/3/14 [日] 13:00開演
PLAT小劇場シリーズ
木ノ下歌舞伎『義経千本桜一渡海屋・大物浦一』
2016年、木ノ下歌舞伎10周年の幕開けに上演した話題作。古典の名作が現代を射抜く逆襲劇。満を持してPLATに登場!
●会員先行＝2021年1月16日(土) ●一般発売＝2021年1月23日(土) ●作＝竹田出雲、三好松洛、並木千柳 ●監修・補綴＝木ノ下裕一 ●演出＝多田淳之介 ●出演＝佐藤誠、大石将弘、大川潤子、立蔵葉子、三島景太ほか ●会場＝PLATアールスペース ●料金＝[全席指定]一般3,500円ほか



木ノ下歌舞伎『義経千本桜一渡海屋・大物浦一』2016年 / 撮影:bozzo

若手音楽家育成事業
プラットワンコインコンサート
「若い音楽家には活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を提供する」と企画されたPLATオリジナルのワンコインコンサートです。500円で贅沢なひとときをお過ごしください。
●会場＝PLATアールスペース
●料金＝[全席自由・整理番号付]500円
12/24 [木] 14:00開演
『フルートで贈る煌めく世界～心躍るリズムに乗せて～』好評発売中
Trio Esters [トリオ・エステル]
満吉香苗(フルート)、岡田薫子(フルート)、鈴木風香(フルート)
3/22 [月] 19:00開演
『ピアノのヴィルトゥオーゾ～名曲に乗せて～』
白井那奈(ピアノ)、高柳満里奈(ピアノ)
●会員、一般同時発売＝12月23日(水)
3/29 [月] 14:00開演
『歌の翼に乗せて』
Lis [リス]
波多野千夏(ソプラノ)、笈悠里(ヴァイオリン)、植田結衣(ピアノ)
●会員、一般同時発売＝12月23日(水)

「青春時代」
芸術文化アドバイザー
桑原裕子



撮影：伊藤華織

「目押し」というのは文字通り、目で押すということです。強い目で見据え、相手を圧倒する。目で殺すんです!こんなふうに。ハイ!」号令を受けると、私を囲んで立っていた黒装束の集団は一斉にカッと両目を見開いた。ギロギロと光る眼球が今にもロケットのように飛び出してこちらへ襲いかかってきそう。恐ろしさに身を震わせている私に向かうその男女たちは、次の号令を受けると突如大きく口を開け、狂気じみた怒声で叫びました。

「あ!え!い!う!え!お!あ!お!」
嗚呼……これはほんとうにヤバいところに来てしまった……。

暗い四面体の稽古場で、あの時私は心底逃げ出したい気持ちで一杯でした。こんな世界に入ってしまった我が選択を恨み、演劇とはカルトなのだを認識を新たにしたりはもう20年以上前。演劇研究所なる場所に入所した、プレ稽古初日のことです。

黒Tシャツ、黒スパッツで身を包んでいるのは研究所の先輩方で、その中央に立つ演技指導の先生は、彼らを見本に次々と難題を出します。

単なる発声練習をすると思っていた私はいきなりの「目押し」洗礼を受け、続くトレーニングもまた「獣のように吠えながら四つ足で地面を這いまわる」であるとか「全員で見えない鎖を引き回す」などという、通常のテンションではまったくやれそうにないものばかり。

新劇の研究所に入ったはずが、やっていることは完全なアンダーグラウンド。あちこちでウオオ、ウオオとうめく声を聞きながら、稽

古場の出口を数分に一度チラ見しては、どこでやめるというかばかりを考えていました。

私は高校三年生の時に初めて受けたオーディションで平田オリザさんの『転校生』という作品に出て、演劇界に足を踏み入れました。

『転校生』はプラットでも現役の高校生たちによって上演された舞台ですが、この作品をはじめ、当時オリザさんが創る現代口語演劇は「静かな演劇」と呼ばれてブームになっており、普段の自分たちの会話に近い、いわゆるアングラとは対極にある演技スタイル。そこが起点になっている私からすると、研究所の稽古はすべて奇妙で異常なものに見えたのです。

なかでも歌舞伎の『白浪五人男』の口上を繰り返しながら稽古場を縦横無尽に動き回るといふ稽古は、今でも歴代の研究生と会えば必ず語り草になる特殊なカリキュラム。

「問われて問われて名乗るもおこがまし、おこがま、おこがましいが!!」と気がふれたように叫びながら、とにかく休まず走ったり跳ねたり駆け回ったりせよというもので、しかし最後はふらつく体をたたき起こし、舞台中央で「につぼーん、駄右衛門!」と凜々しく見得を切らねばいけません(もちろん目押ししながら)。

生徒たちは壁に激突したり、目を回して先生の机に突っ込んだり、誰も彼もが無様にこけつまろびつ。しかし先生はそんな私たちを笑わず、常に少し潤んだような目で言うのです。「自分を瞬時に解放し、かつ自分の馬を

乗りこなしなさい」

そう言われても、10代の私にはその稽古がひたすらヘンテコで恥ずかしいことにしか思えません。逃げる隙がないからやらざるを得ないという感じで、いやいや叫んで走り回っては喉を枯らしていました。先生の稽古には普通の台詞稽古がほとんどなく、絵本や古典を題材に踊ったり創作したり、体力の限界まで使い果たすような内容で、いつもヘトヘトに疲れていました。他の演劇養成所の話を聞けば「あっちはまともだな」と同期の仲間ではやっていたものです。

ただあの日々は、身も心も演劇にまみれた初めての体験であり、私にとっての青春だったと思います。そしてあれだけ嫌だった稽古も、今振り返るとすべてが貴重で、あれがなければこうして演劇を続けていなかったかもしれないときえ思うのです。

先日のこと、今も芝居を続けている同期の友からメールが来ました。それは、先生が肺炎で逝去なさったという報せでした。

友人のメールは「先生の熱意に足る生徒でいよう」と締めくくられていました。

先生。私は当時、先生の期待に沿う生徒ではなかったと思います。ですが私も先生から大きく影響を受けた一人です。先生の仰っていたことが、今なら分かるような気がします。これからも頑張ります。先生の熱意に足る生徒になれるように。

円・演劇研究所の福沢富夫先生。本当にありがとうございました。

22期生の落ちこぼれ、桑原裕子より。

SUPPORT

知識製造業
三遠機材株式会社
http://www.san-en.co.jp

Gallery 48
呉服町48 TEL.54-4848

有限会社 魚伊
電話 52-5256

株式会社 竹尾建築設計事務所
代表取締役 竹尾 誠
豊橋事務所/豊橋市平川南町91-2 〒440-0035 Tel.0532-62-1331(代) Fax.0532-62-1332
浜松事務所/浜松市東区流通元町13 〒435-0007 Tel.053-422-3628(代)

グロトリアンピアノ地域特約店
白羽楽器 株式会社
電話053-464-3015

竹内産婦人科
産婦人科 婦人科(不妊治療)
豊橋市新本町23 (豊橋市西産婦人科) 産科Q

ケンチク 701
KURONO ARCHITECT STUDIO
y.qlo0170@gmail.com

うつ、統合失調症、精神遅滞、発達障害、脳梗塞、人工透析、人工関節など
豊橋・豊川障害年金相談センター
初回相談無料 ☎0120-891-498
豊橋市花中町 160-9 障害年金専門社会保険労務士 竹下英司

看板広告 アラキスタジオ
豊橋市上伝馬町16 電話52-5586番

本と文具なら
精文館書店
TEL.54-2345

ONOCOM なければつくる
株式会社オノコム

外科・内科・胃腸科・麻酔科・肛門科
医療法人栄真会 伊藤医院
豊橋市小池町字原下35 電話45-5283(代)

創業文政年間 巖きく宗
豊橋市新本町40 電話52-5473番

調理と製菓のおいしい資格。
豊橋調理製菓専門学校
豊橋市八町通一丁目22-2 TEL.53-2809

豊橋銀行協会 (順不同)
三菱UFJ銀行 みずほ銀行 静岡銀行 名古屋銀行
三井住友銀行 三井住友信託銀行 清水銀行 第三銀行
十六銀行 愛知銀行 中京銀行 大垣共立銀行

創業江戸 御茶屋菓子専門店
若松園
御菓子司

西村能舞台
豊橋市上伝馬町
代表=西村 隆二
Mail=nnbutai@gmail.com

気まぐれコンサート
事務局/0532-62-9259(小川小恵司)

安心・安全な地下駐車場
パ・ウ500
ソウの親子の
電帳が印留
プラット主ホール・アートスペース公演等へのお客様は
30分150円を30分100円(上限4時間まで)に割引します。

整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科・麻酔科
医療法人 塩之谷整形外科
理事長 塩之谷 昌 院長 塩之谷 香 副院長 市川義明
豊橋市植田町閑取54 電話0532-25-2115(代)

豊橋名産 傘あくわ

井上皮フ科クリニック
診療時間 月・火・木・金 10:00~13:00 16:00~19:00
土 10:00~14:00 休診日=水・日・祝
電話0532-55-7007 愛知県豊橋市向山町字中畑13-1マイルストーン1F

プラス・ワンの付加価値をお客様に提供いたします。
共和印刷株式会社
豊橋市小池町36番地の1 TEL46-3281 FAX46-3285

整形外科・皮膚科・リウマチ科・リハビリテーション科
医療法人 大岩整形外科・皮フ科
院長 大岩俊久 豊橋市大橋通二丁目115 電話55-2100

伝統的工芸品豊橋筆
書道用品専門店
高誠堂
豊橋市呉服町四拾四番地 電話52-5514

ISO9001 ISO14001 愛知ブランド企業 認証・認定取得
株式会社 三光製作所
三光精密工業株式会社
豊橋市佐藤一丁目12番地の3

生活にファインクオリティ
sala

調理と製菓のおいしい資格。
豊橋調理製菓専門学校
豊橋市八町通一丁目22-2 TEL.53-2809

広告募集

TICKET CENTER

チケットの購入・お問合せ
プラットチケットセンター

電話・窓口
0532-39-3090 [休館日を除く10:00-19:00]
オンライン
http://toyohashi-at.jp [24時間受付・要事前登録]



プラットフレンズ募集
入会金・年会費無料

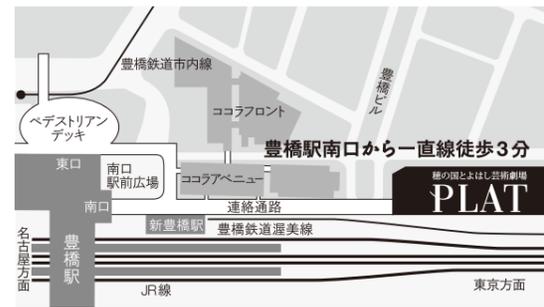
- 特典
- 1 公演情報をメールでご案内します。
 - 2 インターネットでチケット予約ができます。
 - 3 主催公演のチケットを一般発売に先がけてご予約できます。
- ※劇場窓口またはホームページからご登録いただけます。

U25・高校生以下割引ご案内

- ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
- 料金
U25[25歳以下]:公演ごとに指定する座席の半額
高校生以下:1,000円
 - 購入方法
各公演の一般発売初日から取扱い。
 - その他
本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。
座席の指定はできません。要・入場時本人確認書類提示。
一部例外あり。詳細は各公演チラシ・HPにて。

年末年始休館のお知らせ

穂の国とよはし芸術劇場は、下記の期間休館いたします。
令和2年12月29日(火)~令和3年1月2日(土)
なお、上記の期間中プラットチケットセンターは電話および窓口とも休業いたします。
チケットのご予約は、インターネットをご利用ください。
24時間対応いたしております。
休館中のチケットのお引き取りについてはご予約の際にご確認ください。



〒440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地
電話=0532-39-8810[代表]
開館=9:00-22:00 休館日=第三月曜・年末・年始。
第三月曜が祝日の場合はその翌平日。
豊橋駅(JR東海道新幹線、東海道本線、名古屋鉄道)、
新豊橋駅(豊橋鉄道渥美線)直結。豊橋駅南口から徒歩3分。
※駐車場はありません。公共交通機関をご利用いただくか、
お近くの公共駐車場等をご利用ください。

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT